

古に於て認むるが如きは、甚だ注意すべきことにして、此の場合に於る南徙も、裴羅が九姓諸部を統一したる結果に外ならずと曰ふべし。

此の翌年天寶四載には裴羅は又突厥の白眉可汗を攻めて之を殺し、遂に全く突厥を亡し、こと前に見たるが如し、此の後其の死没の年なる天寶六載に至る間に於る事業の如何なりしかは知り得べからざれど、新唐書回鶻傳には、「斥地愈廣、東極室韋、西金山、南控大漠、盡得古匈奴地」と記せり、されば大概漠北のアルタイ山脈以東、興安嶺山脈以西の地は、略ぼ其の勢力の下に歸するに至りしものなるが如く、果して然らば、かゝる形勢は天寶三載九姓を統一したる後の三年間に於て作られたる所と見ざる可らず。

## 第二章 磨延啜

(トハク Tangridā bulmīs il itmīs bilgā xayan) 登里囉沒密施頡駼德密施毗伽) 可汗の時代

(唐より與へたる徽號を英武威遠と曰ふ)

新唐書回鶻傳に依れば、裴羅の後を繼ぎしものを其の子磨延啜〔六七〕と爲す、舊唐書迴紇傳には此の可汗を記さず、反りて乾元二年(七五九年)「夏四月迴紇毘伽闕可汗(裴羅即ち)死」と記し、此の時迄裴羅の位に在りしことを示せども、唐會要及び冊府元龜繼襲篇〔六八〕には、懷仁可汗即ち裴羅(會要には逸標苾と記す)が天寶六載(七四七年)に死するや「子磨延啜立、國人號爲葛勒可汗」と記し、舊唐書本紀にも乾元元年七月「丁亥制上皇第二女寧國公主出降英武威遠毗伽可汗」と記せり、英武威遠可汗といふは、唐より磨延啜に與へたる徽號にして、裴羅の有したるものに